

—イザヤ66章・10-14c、ガラテア6章14-18、ルカ10章・1-12、17-20—

その後、主はほかに七十二人を任命し、御自分が行くつもりのすべての町や村に二人ずつ先に遣わされた。そして、彼らに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからである。家から家へと渡り歩くな。どこかの町に入り、迎え入れられたら、出される物を食べ、その町の病人をいやし、また、『神の国はあなたがたに近づいた』と言いなさい。 —ルカ 10章—

主の働き手

イエスに遣わされる、収穫のための「働き手」を、主イエスは、狼の群れに送り込む小羊に譬えます。狼に対して全く無力な小羊です。狼に戦う事ではありません。狼の囚われ身となつて真の成長を妨げられている、弱者たちの世話をし、その成長を助けることでしょう。

神は世界を創造された時、全ての被造物の管理を人間に委ね、共生、共存で人類の幸せを望まれたのに、人間は神を無視し、神になり代つて、互いに世界の主人公を競って、世を悪の支配下に渡し、人間が人間を苦しめて文句を言わせないシステムを作つて、世界は勝ち組だけが潤つて弱者を犠牲にする狼の世界と化したのです。その抑圧の中で、生き場を失った者が自ら道を切り開いた世界が、不幸にも、ヤクザであったり、暴将軍様やISの国際テロであ

ったりし、身近では、自己中、キレる子、引きこもり、不登校、依存症、ホームレス、拡大自殺であったりするので。彼らに必要なのは、法の裁きや制裁ではなく、それ以前に、「生きるために愛される」ことなのです。人間に滅ぼすべき敵は存在しません。争いはみんなその根底にあるのは、わがが愛されるための訴えなのですから！

イエスの洗礼を受けた私たちの支えとなる誇りは、単に「神の子」とされたことではなく、父である神の心を生きる、新しい命に創造されたことです。イエスは、悪に支配されている世と、その考えや生き方から、人々を神によって全く新たにされた生き方に導くために来られ、それを伝えるご自分の分身として人々を狼の群れの中に派遣されるのですから、手塩にかけた小羊を狼の群れの中に派遣す

るにあたって、人の不可能も可能にする最強の盾である「聖霊」を同伴者と言います。聖霊を同伴者として派遣された小羊は、弱くてもそれを唯一の盾にして、神と共に狼の群れの中を突き進むのです。聖霊と共にある私たちはパウロが然り、ペトロが然り、もはや、狼の中の一匹の小羊であつても「イエスの証人」となる使命を胸に抱きしめて、死をも恐れませんが、初めてのお使いに出かけるあの幼い子供のように！

2022年 7月3日

主任司祭 昌川信雄

